

天声人語

東京・渋谷の映画館で「すぶぬれて大ころ」という作品が上映されている。描かれたのは、自由律俳句の世界に彗星のごとく現れ、わずかに句集2冊を残して早世した住宅顕信。短くも壮絶な生涯に迫った労作である▼「取りつかれたように句を作ったのは2年半。多くは白血病の治療中に詠まれた。短くて青くさい句なのにグッと来ます」。そう語る本田孝義監督(50)は、顕信と同じ岡山県の出身。映像作家として壁にぶつかったとき、読んで胸が震えたという。だが今年三十三回忌を迎える地元でも知る人は減りつつある▼「若さとはこんな淋しい春なのか」。五七五の定型や季語にとらわれず、簡潔な言葉に思いを注ぎ込む。実生活では市の清掃の職に就き、僧侶となり、離婚して男児を育てた。山あり谷ありの日々を送ったようだ▼病床で詠んだ句がひときわ切ない。「レントゲンに淋しい胸のうちのぞかれた」。治したい、もっと詠みたいと祈るが、病魔は赦ししない。
 「病んでこんなにもやせた月を窓に置く」。1987年、25歳で旅立つた▼映画の中では、男子中学生の目を通して顕信像が描かれる。少年は陰湿ないじめに耐え、無力感に沈んだ夜につぶやく。「気の抜けたサイダーが僕の人生」。蹴られて雨に打たれる弱い自分はまるで「すぶぬれて大ころ」。顕信の句を支えに少年は立ち上がる▼一切のむだをそぎ落とした句から、20代の情熱がどれも辞世の句のように胸に響く。

2019・6・9